

4-4-1.奄美諸島貝塚時代・グスク時代における植物食利用

高宮 広土

Plant Foods Consumed during the Shellmidden and Gusuku Periods in Amami Archipelago

TAKAMIYA Hiroto

鹿児島大学国際島嶼教育研究センター

International Center for Island Studies, Kagoshima University

要旨

奄美諸島においては、1970年代より集約的な発掘調査が行われ、「いつ、どこで、何があったか」についてはここ数十年でかなり明らかになってきた。しかしながら、貝塚時代およびグスク時代における植物食利用に関しては暗中模索の時代が長期間続いていた。1990年代よりフローテーション法が発掘調査に導入され、遺跡から系統的に炭化した植物遺体(種実)を回収する試みがなされた。2015~2019年間においてもいくつかの遺跡でフローテーションが行われ、奄美諸島貝塚時代およびグスク時代の植物食利用が徐々に明らかになりつつある。

はじめに

奄美諸島においては、考古学的調査の歴史は100年以上ある。特に1970年代からは高度経済成長とともに、多くの遺跡が発掘調査の対象となってきた。また、このころの発掘調査の特徴として、これまでの点的な調査から広大な面積を対象とする面的な調査が実施された。広大な面積を発掘調査の対象としたことで、土器を含む多様な人工遺物や住居跡などの遺構が検出され、「いつ、どこで、何があったか」などのテーマに関する答えがおぼろげながらみえてきた。しかし、貝塚時代およびグスク時代における植物食利用に関してはほとんど理解されていなかった。より多くの遺跡で発掘調査が実施された沖縄県においても植物食利用は解明されておらず、推測あるいは仮説の域内で語られていた。奄美諸島においてはその沖縄県で提唱された推測・仮説で貝塚時代およびグスク時代の植物食利用が語られていた印象を受ける。奄美諸島においては1990年代より遺跡より炭化した種実を系統的に回収する方法として、フローテーション法が発掘調査に導入され、その結果徐々にではあるが、奄美諸島貝塚時代・グスク時代における植物食利用がみえてきた(高宮・千田 2014)。本報告では、この5年間における成果を紹介したい(編年に関しては表1を参照のこと。なお本報告ではA案を利用する)。

貝塚時代

a) 半川遺跡

半川遺跡は奄美大島龍郷町に所在する遺跡で、2004年に第2次調査が実施された際は前2期の遺跡と考えられた(中山 2009)。最下層である第V層からは多量の堅果類(ほとんどがシイ属子葉)が検出された。シイ属子葉2点を炭素14年代測定法により、年代を測定すると11000~11200年前という年代を

Plant Foods Consumed during the Shellmidden and Gusuku Periods in Amami Archipelago

得た。昨年度第3次発掘調査を実施し、回収された植物遺体の分析は終了していないが、やはり多くの堅果類を回収した。そのうち2点を年代測定した結果、上記と類似の年代であった（高宮 2019）。

表1：奄美（沖縄）諸島の編年

BP	南島中部圏（奄美・沖縄諸島）				本土 （北海道以外）
	A案	B案	C案	D案	
ca. 11/12-15 AD	グスク時代				室町 鎌倉
1,400	貝塚時代 後2期	貝塚時代 後III・IV期	貝塚時代後期	弥生～ 平安並行期 後半	平安 飛鳥
2,600	貝塚時代 後1期	貝塚時代 後I・II期		弥生～ 平安並行期 前半	古墳 弥生
3,000	貝塚時代 前5期	貝塚時代 前V期	貝塚時代中期	縄文時代晩期	縄文時代晩期
4,000	貝塚時代 前4期	貝塚時代 前IV期	貝塚時代前期	縄文時代後期	縄文時代後期
5,000	貝塚時代 前3期	貝塚時代 前III期		縄文時代中期	縄文時代中期
6,000	貝塚時代 前2期	貝塚時代 前II期	貝塚時代早期	縄文時代前期	縄文時代前期
7,000	貝塚時代 前1期	貝塚時代 前I期		縄文時代早期	縄文時代早期
10,000 32,000	土器文化の 始まり？	？	？	？	縄文時代最前期 旧石器時代

*本土編年とのおおよその比較であり、南島中部圏の時代区分とは必ずしも一致しない。

オモナフ
b)面縄第4 貝塚

面縄第4 貝塚は徳之島伊仙町に所在する面縄貝塚群の1つで前3期～前4期の遺跡である。土壌サンプルは少量で、その結果回収された植物遺体も少なかったが、それらはイタジイやシマサルナシであった。炭素14年代測定はなされていない（高宮 2016）。

クズリ
c)崩り遺跡

崩り遺跡は喜界島喜界町に所在する遺跡で、貝塚時代前4期～前5期と中世に属する遺跡である。貝塚時代前4期～5期期のサンプルには、堅果類の子葉と思われるもの、堅果皮、堅果皮と思われるもの、タブノキ子葉、タブノキ子葉と思われるもの、およびシマサルナシなどが検出された。タブノキ子葉と思われる植物遺体の炭素14年代は約3600年前であった（高宮 2018a）。

トウバツル
d)塔原遺跡

塔原遺跡は徳之島天城町に所在する貝塚時代前5期の遺跡である。土壌サンプルは大型の住居跡（長軸×短軸 8x6m）から主に回収された。同定できた植物遺体は堅果類子葉、堅果皮、シマサルナシおよびブドウ属であった。堅果類子葉にはイタジイが含まれると思われる。堅果類子葉の炭素14年代は約2900年前であった（高宮 2017）。

e)カンテナ遺跡

カンテナ遺跡は徳之島伊仙町に所在する貝塚時代前5期の遺跡である。この遺跡でも土壌サンプルは住居跡より回収された。土壌サンプルは計9サンプルであったが、そこから堅果類子葉、堅果皮、および不明種実が同定されている。この遺跡の年代は回収された土器型式によるもので、残念ながら炭素14年代測定は行われていない（高宮 2018b）。

f)面縄第1 貝塚

上記面縄第4 貝塚に近接する遺跡で貝塚時代後2期の遺跡である。回収された植物遺体はイタジイ、堅果類子葉、堅果類子葉と思われるものおよび堅果皮と思われるものであった。遺跡の年代は出土土器よりの推定で、炭素14年代測定は行われていない（高宮 2016）。

グスク時代

a) ^{まえあたり}前当り遺跡

前当り遺跡は徳之島伊仙町に所在する遺跡である。カムイヤキや中国産白磁などが出土し、貝塚時代の終わりからグスク時代の初めの遺跡と考えられている。出土した植物遺体はイネ、コムギ、オオムギ、アワ、マメ科などとイタジイ子葉などであった。イネ、オオムギおよびコムギの年代測定結果は約990～1150年前であった（高宮 2018c）。

b) 崩り遺跡

上記崩り遺跡の中世の部分である。11世紀～12世紀を中心とする土壌サンプルであった。出土した植物遺体はイネ、オオムギ、コムギ、アワおよび堅果皮であった。オオムギのなどの炭素14年代は700年前頃と600年前頃に集中していた（高宮 2018a）。

まとめ

この5年間で奄美諸島に所在する7遺跡より出土した植物遺体の分析結果を紹介した。年代は貝塚時代1期（炭素14年代測定結果により半川遺跡を貝塚時代前1期とする）からグスク時代初期に属する遺跡である。分析結果は貝塚時代の人々は野生の植物に依存し、グスク時代になってイネなどの栽培植物が利用されたことを如実に物語っている。つまり、貝塚時代は狩猟・採集・漁撈の時代であり、グスク時代になって農耕が生業の基層となったことが明らかになりつつある。奄美諸島（沖縄諸島も含む）のような島で、これだけ長期間狩猟・採集・漁撈民が生存した島は世界的にほとんど知られていない。また、今回の分析では約1000年前に狩猟・採集・漁撈から農耕への変遷があったことが支持されるようである。今後は貝塚時代の植物食利用のさらなる詳細な検証と1000年前頃になぜ農耕が導入されたのか、が重要なテーマとなるであろう。

引用文献

- 高宮広土 2016. 面縄第1貝塚、面縄第4貝塚出土の植物遺体。「面縄貝塚 総括報告書」（伊仙町教育委員会編）, 140-141, 伊仙町教育委員会, 伊仙町
- 高宮広土 2017. 塔原遺跡出土の植物遺体。「塔原遺跡（4）」（伊仙町教育委員会編）, 77-86, 天城町教育委員会, 天城町
- 高宮広土 2018a. 崩り遺跡出土の植物遺体。「崩り遺跡I」（喜界町教育委員会編）, 122-132, 喜界町教育委員会, 天喜界町
- 高宮広土 2018b. カンテナ遺跡出土の植物遺体。「前当り遺跡・カンテナ遺跡」（伊仙町教育委員会編）, 117-119, 伊仙町教育委員会, 伊仙町
- 高宮広土 2018c. 前当り遺跡出土の植物遺体。「前当り遺跡・カンテナ遺跡」（伊仙町教育委員会編）, 61-70, 伊仙町教育委員会, 伊仙町
- 高宮広土 2019. 半川遺跡（第2次調査）出土の植物遺体。「中山清美と奄美学」（奄美考古学会編）, 485-492, 奄美考古学会, 鹿児島市
- 高宮広土・千田寛之 2014. 琉球列島先史・原史時代における植物食利用—奄美・沖縄諸島を中心に—。「琉球列島先史・原史時代における環境と文化の変遷に関する実証的研究 研究論文集【第2集】琉球列島先史・原史時代の環境と文化の変遷」（高宮広土・新里貴之編）, 127-142, 六一書房, 東京都
- 中山清美 2009. 掘り出された奄美諸島. 157頁, 財団法人 奄美文化財団, 奄美市